

英雄たちの顔

榛葉英治

月刊ペン社

榛葉英治

英雄たちの顔

月刊ペン社



そ

英雄たちの顔

昭和四十六年六月十五日 初版発行

定価 四八〇円

著者 榛葉英治 ©

発行者 原田倉治

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 株式会社 月刊ペン社

東京都中央区銀座三の一〇の一九

美術家会館ビル

電話 東京 (03) 五四二―一九七二 (代)

振替口座 東京 六九八一六

落丁・乱丁はお取替えます

(分) 0023 (製) 008010 (出) 1940

目次

血ぬられた碑——毛利元就 5

第六天魔王——信長 29

吉と凶の籤——秀吉と光秀 57

蜘蛛の糸——家康の謀略と伊達政宗 79

巨大な銅の柱——徳川家康 107

忠臣か悪臣か——且元と治長 127

晩照の武士——真田幸村 145

復讐の十字架——馬渡重則と天草四郎 167

テロリストの生涯——近藤勇 197

葵は枯れず——大久保一翁と勝海舟 215

偉大なぬけがら——西郷隆盛 239

あとがき

装丁／佐多芳郎

英雄たちの顔

血ぬられた
碑^{いしぶみ}

——
毛利元就^{もうりもとなり}

元就、家督をつぐ

毛利家の幼い当主、幸松丸こうしょうまるの死は、猿懸城さるがけにいる元就もととなりに知らされた。

「なに、城から使者がきたとな」

日頃ひごろ、沈着な元就だが、このときはとぶように館やかたの大玄関に出てきた。

人ばらいをした奥まった書院で、使者と向いあった。幼い甥おいが死んだという使者の口上を、元就はだまってうなずいて聞いていた。

「……して、志道広良ひろよしは、何と申しておる？」

「はい。やはり殿には、軽々しくお動きにならぬほうがよろしかろうと申しておられました」

「うむ」

脇息きょうそくにもたれた元就は大きくうなずいて、眼めをとじた。二人がだまると、山あいの小城は蟬せみしぐれにつつまれる。ヒグラシも鳴きはじめ、むし暑かった館にも山のほうから日暮れの冷気がかよいはじ

めた。

志道広良の腹心の家来は熱誠を面^{おもて}にみせて、元就をみつめた。

「万事、それがしにお任せあれと、御家老は申されました」

「ふむ……」

元就は立って、麻の帷子^{かたびら}の背中をみせ、谷に面した書院の窓の障子をあけた。使者は、二十七歳の若い城主の後ろ姿に目を凝らした。

その顔はみえないが、元就の後ろにまわした両手の握った拳^{こぶし}が、ふるえているようにみえた。それは心のよろこびをおさえているふうにもとれた。

「もう、さがってよい」

山を見たまま、元就は本家の家来にいった。毛利家の当主は死んだ。では、毛利家を継ぐのは、誰か……？ さがってゆく足音が消えても、元就はまだ西の杉山を見ていた。夕陽^{ゆうひ}が杉の梢^{はすえ}にあたり、光彩を放っている。

人のいない書院でふりかえったその顔には、ぞっとさせる笑いがあった。

元就の居城といっても、この安芸^{あき}ノ国、多治比村の猿懸城はわずか三百貫の所領で、本家の郡山城^{こうりやま}とはくらべものにならない。

この城は父の弘元が隠居をした処^{ところ}で、その父が死んだあと、松寿丸といった元就は、後見役の井上元盛から、この猿懸城を追出された。

京都で、「おかたさま」と呼ばれる婦人に養われていたが、元盛が死んだので、やっと城に帰ることができたのである。

この話でもわかるとおり、二男坊に生れた元就は、幼いときから、周囲の冷たい目のなかで育ってきたのだった。

その元就はいまは小さくても城持ちの立派な若者である。この十年間を、武将として戦国の時代に生きてきた。

二人兄弟の元就の兄は興元^{おきもと}といった。十年まえに、二十四の若さで病死をした。あとには幸松丸という二つになる忘れ形見がのこされた。母かたの祖父の高橋久光と、叔父にあたる元就とが後見役になってきた。

その久光はこの春、戦死をし、後見役には元就一人がのこされたのだった。

当時、毛利の郡山城は、大内氏と尼子氏の両勢力にはさまれていた。小国の悲しさ、どちらかの勢力について保身を図らなければならなかった。

毛利家は尼子がたについていた。その尼子経久^{つねひさ}の命で、大内側の鏡山城^{かがみやま}を攻めることになった。

元就は九ツの幸松丸を後見して、出陣した。戦いは勝った。しかし幸松丸は郡山城にもどると、急死したのである。九ツの少年には、強行軍や半月にわたった陣中生活は無理だったのかもしれない。

いづれにしても、毛利家に当主がいなくなったことは事実である。

郡山城では重臣連中が額をあつめ、連日のように、世継ぎのことで評議をしている。しかしかんじんの元就は、山のなかの猿懸城にひきこもったまま、うんともすんともいってこない。

いっぽう猿懸城には、本城での評議の逐一が知らされていた。

それによると、重臣は二ツの派に割れている。元就を継嗣に推す派と、これに反対する重臣らである。反対派は尼子家から養子を仰ぐか、それとも元就の腹ちがいの弟の相合元綱をかつぎ出すかを主張している。反対派は、この際、尼子氏に款を通じようとしていることはあきらかだ。その黒幕には尼子の老臣、亀井秀綱がいる……。

この二派が対立して、継嗣はきまらずに、いたずらに日がたっていた。

元就派の重臣には、家老の志道広良がいる。志道からは、「万事、任せていただきたい。軽々しくうごかれないように……」と、たびたび言ってきたのだった。

この志道広良は、元就とは盟友の間柄であった。元就は十七のときに、この広良と「二人ともに力を合せ、興元に忠誠をつくそう」との誓紙を交したことがあるのだ。

郡山城での評定はラチがあかない。

ある日、元就は館の谷を見おろす奥の間で、涼しい風のはいる板の間に薄べりを敷かせ、うたた寝をしていた。

元就はふいに体をおこした。夢をみたのだった。白ヒゲの老人があらわれ、一枚の短冊を自分にさげた。それにはこんな句が書いてあった。

毛利の家、鷹の羽をつぐ脇柱

立った元就はすぐに侍頭を呼んだ。

「人を集めい。戦の用意をせよ！」

「はッ」

しずかだった館の内外は、武器をもった武士のもののしさと、殺氣にあふれた。

下知をすると、元就は奥書院にひっこんだ。

元就の手勢は相合の館におそいかかった。元就の異母弟にあたる元綱の首をあげ、一族郎党のことごとくを殺した。

夏の陽ざしが、館の庭の血の痕を乾かしていった。

この報を聞いて、郡山城の大手門はひろく開けられた。猿懸城にむかう二人の使者が出ていった。その一人は宿老の井上元兼で、懷中には「元就どのに家督御相続をねがう」重臣十五人の連判状がおさめられていた。

志道広良からも元就の入城をねがってきた。

こうして一日で、毛利元就は郡山本城の城主になったのである。

ずっとのちに、元就は息子の隆元たかもとに送った手紙のなかで、自分の若い日のことをこう書いている。

「元就が十九歳のときに、兄の興元は早世した。その後は自分には、親、兄弟、伯父、甥などという肉親は一人もなく、自分はただ、ひとり身になった……」

しかしこの述懐は、事実に反している。元就には相合元綱ら二人の異腹の弟と一人の妹、それから甥の幸松丸がいたのである。その甥は急死した。そして弟の一人を、彼は殺した。

それにもかかわらず、このように見え透いたつくりごとをするとともに、毛利元就の過去の陰の部分があり、非情といわれる彼の性格の謎があるのだ。

毒を薬にする

こうして、元就は毛利家の当主になった。

それでも郡山城の毎日が、安穩にすごされるわけではなかった。この領国は諸豪族にかこまれていたからである。

さらにこの頃になって、都にいる大内義興は安芸ノ国をふたたびとりもどそうとして、周防の岩国に出陣してきた。そしてその一軍は、石見の銀山城をとりかこんだ。

毛利元就は自分の地位を守るために、尼子側についていた。そしてこの合戦では第三陣を受持った。そこへ第一、第二陣が総崩れになってきた。

八月はじめの日のことで、夜になると大雨になった。第三陣の元就は、土地にくわしい兵だけで奇襲隊を編成した。闇と雨とを利用して、銀山城の包囲軍におそいかかったのである。総大将の陶興房はさんざんに敗れて、廿日市に逃げもどった。

さすがの猛将、陶興房も、元就の武将ぶりにはほとほと参ったとみえて、主君の大内義興にこう進言した。

「毛利元就は、武において智謀のすぐれた若大将でござる。敵とすれば、鳩毒。味方にすれば、良薬。味方にお引入れなさるはかりごとが肝要にござりましょう」

「ふむ、なるほどな。鳩毒を良薬に変えるのも一法じゃな。興房、そちに任す。よきにはからえ……」

大内義興はうなずいた。元就を味方に引入れようというのだ。

このことは、どういうルートかで志道広良につたえられた。志道はいまは元就の股肱である。

志道からこの話を聞いて、元就は考えこんだ。

本家の相続争いのときに、自分が尼子がたから苦い汁を飲まされたことは、いまだに忘れてはいない。それにおれはなにも、腹から尼子に忠誠を誓っているわけではないのだ。いずれも保身の術だ。

「尼子がたの亀井秀綱め、きやつはこのわしを、一生、猿懸城に押込め、日陰者にしようと計りおつた。そんな尼子がたよりも、敵ながら、このわしを認めてくれた陶興房の誼をうけるほうが、得策ではないか……？」

それでも慎重な元就は、家臣を呼んだ。

「誰かおらぬか？ 地図をもつてまいれ」

地図をもつてこさせると、元就は軍扇を膝について沈思熟考をした。

いま、この芸・備両国のまわりを見れば、郡山城は多くの豪族にかこまれている。そしてその多くは尼子がたである。

すぐ一里ほど隣の五竜城には宍戸元源がいて、これとは代々争ってきた。

「……元源とは仲よくせねばならぬ」元就は考えた。「この男とは、当方が折れて出ればうまくゆくだろう。元源めは情には弱い男と聞いているからな」

西南の境には熊谷信直の高松城、武田光和の銀山城……。元就はひとり言をいった。

「この二人は手強いぞ。二人とも、このわしを父の仇と狙っておるからな。二人の仲を割くてだては

ないものか？」

新庄には尼子がたの吉川氏きつかわ。また安芸の沼田には小早川氏がいる。

こうしてこの地図をみ、まわりに割拠する豪族、武將をみると、いまさらのように肌寒はだい思いがする。よくもまあ、これまでどうやら安穩にすごしてきたわいという感懐に、それはつながるのだ。

「これ、誰ぞあるか？」

元就は志道広良を呼ばせた。

「殿、お呼びでござるか」

両の拳をつくかつての盟友に、元就は涼やかな眼をむけた。腹がきまったのである。

「志道、わしは大内につくことにしたぞ」

「はッ、では御決心がつかしましたか」

広良はこの返事を予期していた顔である。

「山口へ使いをやれ。隠密にな」

「心得てござる」

「そうになると、五竜城の宍戸元源だが、わしはどうあっても、元源とは手を握りたい。何かいいてだてはないか……。元源の孫は、もう、元服はすんだかな？」

主君をみつめていた志道広良は、片手で膝をうった。

「……これは、妙案！ 御息女を、元源の孫の隆家にな。目出度めでたいお話にござります」

「広良、これは、ここだけの話じゃ。尼子がたに知れるとまずい。では、すぐにも密使をな」

「はッ、かしこまってござる」

志道は袴はかまの音をさせ、さがっていった。

こうして毛利元就は尼子にそむき、大内がたにつくことになった。

安芸を盗る

しかし元就の近くには、一人の強敵がいた。それは尼子がたの武田光和みづかみで、この光和の首は大内への忠誠を誓う土産物にもなるしろものである。

武田の銀山城を一挙につく考えで、出陣をした。いっぽう武田打倒について、元就は秘策をめぐらしていた。

そのころ、尼子がたに放った隠密が、こんな情報をもたらした。それは内心、元就に小躍りこおどりをさせたのである。

情報にいわく、「武田光和は、このところ永年の同盟者である熊谷信直と不和になっている。それがもとで、武田の家中はまっ二つに割れ、争っている……」

隠密はこうつけ加えた。

「その不和のもとと申すのが、まことに馬鹿らしい話で、女のことにござります」

その話を、元就はフン、フンと笑って聞いていた。

本陣に武将をあつめて言いつけた。